

いのちにつなぐ

日本基督教団
塚口教会
〒661-0012
尼崎市南塚口町
2丁目34-3
電話 06-6429-3019

いのちにつなぐ

愛は労苦です

沖村 裕史

フィリピの信徒への手紙四・一―三

「七一年前の明るく晴れ渡った朝、空から死神が舞い降り、世界は一変しました。閃光と炎の壁がこの街を破壊し、人類が自らを破壊に導く手段を手にしたことがはつきりと示されたのです。」

こう語り始められたスピーチは、七一年目の広島原爆記念日のものでなく、二か月前の五月、合衆国大統領として初めて被爆地広島を訪れた、オバマ大統領のスピーチです。印象深いそのスピーチは、毎年八月六日に語られてきた歴代の総理大臣の挨拶とは、全く質を異にするものでした。

「なぜ私たちはここ、広島に来たのでしょうか?... 私たちは、一〇万人を超える日本の男性、女性、そして子供、数多くの朝鮮の人々、二人のアメリカ人捕虜を含む死者を悼むため、ここにやって来ました。彼らの魂が、私たちに語りかけています。彼らは、自分たちが一体何者なのか、そして自分たちがどうなったのかを振り返るため、内省するように求めています。」

キリスト者であるオバマが語る「内省」とは、単なる感情ではなく、明らかに、聖書が「罪」と呼んでいるものに関わるものです。オバマスピーチは、美しい言葉で飾ることなく、この内省、人間の本质としての罪をしつかりと見据えることから始めて

います。そこから、原爆の出来事、その記憶に向き合おうとします。

「私たちは、この街の中心に立ち、勇気を奮い起こして、爆弾が投下された瞬間を想像します。私たちは、目の当たりにしたものに混乱した子どもたちの恐怖に思いを馳せようとします。私たちは、声なき叫び声に耳を傾けます。... 一つの日か、証言する被爆者の声が私たちのもとに届かなくなるでしょう。しかし、一九四五年八月六日の朝の記憶を決して薄れさせてはなりません。その記憶があれば、私たちは現状肯定と戦えるのです。その記憶があれば、私たちの道徳的な想像力をかき立てるのです。その記憶があれば、変化できるのです。...」

戦争の記憶の大切さに言及する言葉です。誰でも、被爆者が残したいくつかの手記を、手にすることが出来ます。そこには、死がまるで当たり前のようにして普段の生活を覆い尽くし、日々生きることが奇跡であるかのような、そんな日のごが記されています。原爆によって、戦争によって、言葉にすることもできない苦しみ、悲しみを味わった人々の思いが綴られています。

大切なことは、被爆によって引き起こされたことがどのようなことだったのか、そして被爆をされた人たちがどんな思い、どんな願いをもって平和を求め続けられてきたのか、何よりも、そのことを自分の身に起きたこととして受けとめていくことができていくのか、ということなのです。

平和への道のりが決して平坦であるはずもなく、わたしたちの罪もまた実に根深いものです。オバマスピーチは、すべての人々

に、こう訴えかけます。

「私が生きている間にこの目的は達成できないかもしれません。しかし、その可能性を追い求めていきたいと思えます。... 私たちは、築きあげていかなければなりません。破壊をしなければならないのです。なによりも、私たちは互いのつながりを再び認識する必要があるのです。同じ人類の一員としての繋がりを再び確認する必要があります。つながりこそが人類を独自のものにしていきます。... だからこそ私たちは、広島に来たのです。...」

「つながりこそが」と語る、まことの平和への道について、パウロは、このフィリピの信徒への手紙の中で、わたしたち自身の信仰、生活の問題として、わたしたちに教えてくれています。

冒頭一節の直訳、「それだから、わが兄弟たち、愛する、慕わしい者よ、わが喜び、冠よ、このように主にあって堅く立ちなさい。愛する者たちよ」。ここに二度繰り返される「愛する者」とは、ギリシア語のままに訳せば「愛されている者」となります。

あなたを愛しているとは、それほど簡単に言えることではありません。自分のうちに愛が十分でないことを知りながら、愛する兄弟姉妹よ、と呼び掛ける生活をする。そうすることができるとすれば、それは、「愛されている者」だからです。主がわたしたちを愛してくださったからです。主の愛が根拠です。そのことを弁えなければ、兄弟姉妹と呼ぶことはできません。

そして、神は、わたしたちを愛するために、わたしたちを愛する者と呼びかけてくださるために、我が子を、つまりご自身を十字架につけてくださいました。神のみ子であるイエス・キリストのいのちを差し出して、わたしたちを愛してくださいました。そうすることなしには、自分のことしか考えない、すぐに裏切るわたしたちを愛すること

は、実に、難しいことだったからです。

とすれば、わたしたちが他の人を愛するという場合でも同じです。愛する時に苦しみがあるということは当然なことです。苦しみながら愛するなどということはあり得ないと思われる人があるかもしれませんが、しかし、よく考えてみれば、相手が好きだったり気に入ったりしている時だけ愛していると云ったとすれば、そこにどれだけの愛が成り立っていると言えるのでしょうか。

人を愛する者は、いつでも傷つきます。それは、相手が真実であるとは限らないし、自分も真実であるとは限らないからです。相手が背きますし、自分も裏切ります。相手のうちに嫌なことがあることもあるでしょう。しかし、自分にもずいぶん嫌なところがあるのです。相手が、家族、恋人、友人、隣人、教会の兄弟姉妹であっても、そういう者同士の愛です。それでもなお、愛するとすれば、傷を受けるのが当然なのではないでしょうか。

誰でも、自分を愛してほしいと願います。でも、自分を愛してくれる人が、こんな自分のような者愛したなら、きつと傷つくだろうことは当然のことです。そのことを少しも考えないほど無神経にはなれません。なぜなら、わたしたちは、自分が赦してもらおうということなしに、愛されるということもあり得ないからです。それほど、わたしたちの誰もが自分勝手に、自分中心の駄目な人間だからです。犠牲なしの交わりはあり得ません。愛とは、労苦するものです。

オバマスピーチがそうであったように、聖書もまた、決して人間の生活をきれいに済ませようとはしません。聖書は、そのことをわたしたちに強いてきます。それゆえにこそ、わたしたちに最も深い救いを与えてくれるのです。

(二〇一六年八月七日、平和聖日礼拝)